本論考は、思惟の意義の変遷を軸として、「暗号」（Chiffre）思想と「交わり」（Kommunikation）思想というヤスパース哲学の二大契機が、ヤスパース哲学の発展においてどのように変化したかをたどり、暗号思想と交わり思想の関係を考察するものである。

これまでのヤスパース研究では、『哲学』（Philosophie,1932）から、「理性」（Vernunfr）と「包越者」（das Umgreifende）という概念が導入された『理性と実存』（Vernunft und Existenz,1935）や特に『真理について』（Von der Wahrheit,1947）を経て晩年の『啓示に面しての哲学的信仰』（Der philosophishce Glaube angesichts der Offenbarung,1962）へと至る、ヤスパース思想全体において「暗号」と「交わり」の関係を明確化することは十分には行われていない。「暗号」と「交わり」の関係については、局所的なそのつどの顕現である暗号と開かれた理性の統一の相即が問題であるが、顕現と開放性の扱われ方は著作間で変化が見られるので、その変化を綿密に辿る必要がある。

ヤスパースの思想には、「超越者」という思惟を越えたものが志向されつつ、哲学の方法として理性的思惟が重視される姿勢が見られ、思惟を越えたものと思惟の相克・相属がヤスパースの特徴と言える。その相即を理解するためには、「実存すること」における思惟の働きを明確化する必要があり、本論考はその試みでもある。現代においては、近代的な合理性や主体の自立性に対する批判がなされている。形式化する「道具的理性」とは異なる、交わりを遂行する理性、しかも単に抽象的な普遍性ではなく、自己存在の歴史性と相即した共同性を模索する理性を主張する点、また自立性を絶対視も軽視もせずに、他者との交わりにおいて、そしてそれを媒介として超越者と

の関係において、自立性を位置づけるところが、思惟に関するヤスパース思想の現代的意義であると考えられる。

第一章で「実存」、第二章で「哲学的論理学」と「哲学的信仰」という基本的な術語を検討した後、第三章で「暗号」、第四章で「交わり」の発展を考察し、『啓示に面しての哲学的信仰』の地点から見た場合、ヤスパースにおける思惟は「交わりとしての思惟」であり、「自己否定して交わりを遂行する思惟」として特徴づけられることを論究する。最後に第五章で若干の他の思想との比較を行い、ヤスパースにおける「理性」と「交わり」の特徴を考察する。

第一章　ヤスパースにおける「実存」の概念と内実　－キェルケゴールとの比較－

ヤスパースはキェルケゴールの実存概念を受け継ぎ、それを元に自らの哲学を展開したが、両者には違いもあり、特に「現実」の意義が両者で大きく異なっている。

キェルケゴールにおいては、真に実存するためには、どこまでも現実の世界にある自己を打ち捨ててキリストを模倣することが必要とされる。ここでは実存することと、人間がその内にある現実の世界とが、分離していると言えよう。ヤスパースは、経験的な自己存在にとっては世界内の事物は概念的に規定され対象的に把握されるのに対して、本来的な自己存在である実存にとっては世界内の事物は超越者の現象という意味を持つと考え、超越者の現象としての事物を「暗号」と呼ぶ。ヤスパースにおいては、人間がその内にある現実の世界は、我々がそのつどのパースペクティブに制限された内在者として差し当たり否定されるが、それが「暗号」となることに

よって、超越者に充実された言わば高次の現実となることが主張される。ここでは実存することの現実と現実の世界の乖離が、暗号を媒介にして克服されている。

キェルケゴールは、実存することを究極まで純化させて捉えたが、かえって実存を非現実的・抽象的にしてしまった側面がある。確かに、ヤスパースにおいて自己否定という契機が、先鋭化された形では表れておらず、信仰の核心である実存の逆説性が見えづらいことは否定できない。しかしながら、世界を越えた神秘的・非合理的な体験や、抽象的・概念的な絶対者ではない現実に、実存と超越者の関係を見い出そうとするヤスパースの考えの意義は大きいと思われる。

第二章　哲学的論理学と哲学的信仰

ヤスパースは『理性と実存』（1935）以降は、思惟の自己反省である「哲学的論理学」（die philosophische Logik）と、実存の信仰である「哲学的信仰」（der philosophische Glaube）という二つの術語を用いて、実存と超越者の関係を論究するようになる。哲学的論理学は単なる思惟形式の反省に止まらず、対象的な認識を越え「包越者」（das Umgreifende）を感得させ、存在そのものへの視点である「根本知」（Grundwissen）を与えるものとされるが、空虚な反省に陥らないためには、実存という実質を必要とする。また哲学的信仰は対象存在を超越者の「暗号」（Chiffre）として受容する実存の信仰であるが、「哲学的」とされるように、哲学的思惟を契機として含む。

包越者論は、我々に対する現象が非対象的なものから生じること

を覚知させ、暗号という現象を可能にする。また哲学的信仰は実存どうしの交わりにおいて成立するが、包越者論を踏まえることにより内在的な局所的な統一に止まらず、包越者という統一そのものを覚知することによって、実存同士の交わりは純正になる。この意味で、実存の信仰としての哲学的信仰は、思惟の思惟としての哲学的論理学を不可欠の要素とするのである。逆に、実存の超越者への関わりという内実を欠く哲学的論理学は、対象的認識の基礎づけ以上の意味を持たない故に、哲学的論理学も実存の信仰という実質を必要とする。従って、両者は相依相属していると言える。

第三章　「暗号」思想の展開

ヤスパースは超越者の現象としての事物を「暗号」と呼ぶが、我々は「今ーここにある物事の代替されない絶対的現実」として暗号を捉えたい。可能性なき「絶対的現実性」（absolute Wirklichkeit）として超越者は出会われるとされおり、また暗号は解釈されえない、つまり他のものによってその意味を説明されず、そのものとして受け取るしかないとされている。

暗号論は、最初の主著『哲学』（1932）において詳論されており基本的な概念はその後も変更がないと思われるが、思想の構成の中での位置付けは変化が見られる。個々の暗号による充実と個々の暗号を越える開放という緊張は、『哲学』においても個々の暗号と「挫折」の暗号の緊張として語られていると言えるが、挫折も暗号として提示され、その関係は分かりづらい。『理性と実存』（1935）や『真理について』（1947）で「哲学すること」の手段として存在・真理の分裂の統一を追求する「理性」が主張され、統一の象徴として暗

号が提示される。同時に時間の内では真理の完結はありえず、個々の暗号を越えた、無限の開放が言及される。『啓示に面しての哲学的信仰』（1962）においては暗号の闘争が明確に叙述され、さらに徹底的な世界からの超出、「全ての暗号の彼岸」が詳論される。この際、世界からの超出は自己否定する思惟の働きによることが明言され、同時に思惟は暗号の超出に留まることはできず、世界における暗号解読へと還帰することが主張されている。このような展開の背景には、ヤスパースの思索に「理性」が導入され、思惟する信仰である哲学的信仰と啓示信仰の関わりが主題化し、信仰一般の根拠や哲学的信仰と啓示信仰の違いの所以が論究され、思惟の働きが重要な契機になったことがあると考えられる。

第四章　「交わり」思想の展開

ヤスパースは、自他が吟味し合い明らかとなる「愛ある闘争」としての「実存的交わり」を実存生成の場としている。交わりの基本的な概念は『哲学』（1932）以来大きな変更はないが、『理性と実存』や『真理について』（1947）では、「交わりの意志」、「統一への意志」としての理性が導入されたことにより、哲学の方法、超越者の探求の方法として、理性的交わりが位置づけられるようになる。理性自身は内容があるものではなく、悟性の局所的な統一を突破する否定性、悟性を無限に働かせる意志として作用する。逆に言えば、交わりの内にあり局所的であるという制限が踏まえられている限り、悟性の統一は超越者の統一の現象であることになる。超越者は全ての統一であるが、内在的な統一ではなく、開かれた超越的な統一であり、理性による無限の開放が超越者への道として語られる。『哲学的

信仰』(1948)、『啓示に面しての哲学的信仰』(1962) では、「哲学的信仰」が理性を手段とする「交わりへの信仰」と特徴付けられ、啓示に基づく「啓示信仰」との相互否定と相互承認の相即が論究される。哲学的信仰と啓示信仰は相互の交わりにおいてのみ純正でありうると言える。ヤスパース思想の発展を通じて、ヤスパースの哲学において「交わり」の重要性が増し、より中心的なテーマになっていると言えよう。

『啓示に面しての哲学的信仰』の地点から「哲学すること」、「実存すること」に働く思惟を総観するなら、思惟は、内在者からの浮動とさらに個々の暗号からの浮動を遂行し、その上で全ての統一としての超越者を予期しつつ交わりを遂行する思惟と言うことができよう。そしてその浮動は、思惟が自らを否定することにより現出する。そこでヤスパースにおける思惟は、交わりを求めるという自己の働きを完遂することにより自己否定に至り、交わりの遂行へと還帰する思惟、「交わりとしての思惟」、「自己否定して交わりを遂行する思惟」と表現できよう。

第五章　「交わりとしての思惟」に関する他の思想との比較

本章では、我々が「交わりとしての思惟」と特徴づけたヤスパースにおける「理性」の働きと、若干の他の思想の比較を行う。

まず第一節では、カントの共通感覚 (Gemeinsinn) とヤスパースの「交わり」を比較する。カントは「構想力」(Einbildungskraft) と悟性の調和に関する美学的判断の根拠として、「共通感覚」を想定しており、「共通感覚」は、人間の共同性に関わる概念である。カントは自己存在の叡智的な同等性を見てとったが、自己存在の叡智的

なあり方は、内在的な相異を捨象した理想的な認識主観としての自己存在のあり方と考えられる。統一への意志としての理性の機能が十全に発揮されるのは、現実の自己存在同士が相違を越えて交わりを志向する際に理性が推進力となる場合と思われる。自他の相異という実存の根本的状況を踏まえた場合、実存の異質性に基づく交わりの非完結性によって超越的なものが開示されるというヤスパースの主張は、意義深いものと言えよう。

次に第二節では、ヤスパースにおける非対象的なものに関わる理性の働きを論究した上で、同じく対象的思惟とは異なる思惟として、キェルケゴールの「実存弁証法」、山内得立氏の所説に依拠し東洋思想の「レンマ」、を取り上げ、ヤスパースと比較する。ヤスパースの考えでは、対象的思惟は主観と客観の分裂において成立するものであり、主客を包含する存在そのものである「超越者」を把握することはできない。超越者は、対象的でありつつそのことを打ち消すような「暗号」という形で、実存に現象する。キェルケゴールの考えでは、普遍的・客観的な認識をもたらす対象的思惟は、永遠に関わる「実存すること」においては効力を持たない。時間と永遠の関係は「逆説」であり、それに関わる主体的な思惟が、実存にとっては重要である。レンマの考え方では、現実の世界は「縁起」の世界であり、相互に対立する事物を前提にするロゴス的な思惟では捉えられない。世界は「無自性」でありつつ全てのものに成りうる「空」の現れである。ヤスパースの特徴としては、理性が悟性の制限を破りつつ、協同して働くとされ、非対象的思惟が単に反悟性的ではないことが明確化されていることが挙げられる。また、現実において交わりを遂行するという、積極的な世界への関わりが、超越者への

つながりでもあることが主張されている。これらのことによって、ヤスパースにおいては対象的思惟と非対象的思惟の相即性がよく捉えられていると言えよう。

第三節では、田辺元における対他関係の問題を検討し、ヤスパースと比較する。ヤスパースと田辺は、同一性論理の克服という姿勢が共通しており、世界内における実存同士の関わりを媒介とした絶対者の顕現を主張する点も軌を一にする。ただし田辺においては往還の相即という思想に裏打ちされた「否定即愛」の同時成立が説かれている。ヤスパースにおいては、自他の区別がより明確に維持されつつ、自他が交わり続けること、言い換えれば自他の区別があり続けることが、超越者の間接的な顕現であり、分裂にあっての統一への運動という側面が前面に出ている。

結び

ヤスパースは、基本的には思惟による自覚という知の立場に立ち、罪や救済という宗教的な契機は弱く、「超越者」は生ける具体的な神ではない。またヤスパースは、統一や交わりを遂行する理性の由来について、思弁的に究明することはない。ヤスパースは人間にとって存在が分裂しており、理性という結び付ける働きが働いているという状況から思惟を展開し、絶対的なものと人間の関係を模索している。このようなヤスパース哲学の性格は不十分さというよりも、思惟と実存を重視する一つの思想と受け取るべきと思われる。